

## 【東京】

## 大震災3年 支え続ける(中) 福島産の野菜に光を

2014年3月10日

## ◆ 恵泉女学園大 人間社会学部教授 沢登 早苗さん

東日本大震災発生から二カ月後。恵泉女学園大学(多摩市)の教職員や学生たちは、福島県から大学に招いた有機農家の話を聞いてショックを受けた。

「震災前に収穫した野菜でも、福島産というだけで全く売れない」。切実な訴えに心を動かされ、その場にいた人間社会学部教授の沢登早苗さん(54)が中心となり、教職員と学生有志による福島県の復興支援プロジェクトがスタートした。

取り組みの中心は、大学内の「オーガニック・カフェ」で、福島直送の旬の野菜や果物を販売すること。昨年夏以降は週一回のペースで売り、学園祭など学内イベントの機会も利用しており、毎回多くの人を訪れる。

沢登さんは「安全が確認された野菜を扱うことは大切な支援」と言う。定期的に販売することで、繰り返し買ってくれる「固定ファン」の拡大につながる。

恵泉女学園は教育理念に「園芸」を掲げ、大学近くに約七十アールの有機農園をもつ。一年生は園芸が必修科目で、授業を通じて農作物に触れたり、農家と交流したりしている。沢登さんは有機農業の専門家。二十年前から学生に農業について教えてきた。

福島では関係者の努力の結果、土壌から作物に放射性物質が移行することはほとんどなくなった。作物は徹底的に検査して出荷されるが、風評被害との戦いが続いている。沢登さんは「有機作物を好んで食べてきた人ほど、福島県産に拒否反応がある」と表情を曇らせる。

震災から三年が経過し、人々の関心が被災地に向かなくなっていると思う。「一時的な支援に終わらせず、これからも福島の作物を売り続けたい」と考えている。

大学のオーガニック・カフェでは、有機野菜カレーやけんちん汁など、福島の作物を使った料理を提供している。福島の有機カボチャをふんだんに使ったケーキをいただいた。ほどよい甘みが口の中に広がった。(小松田健一)

<さわのぼり・さなえ> 山梨県出身。東京農工大大学院連合農学研究科修了。1994年に恵泉女学園大学非常勤講師に就任し、専任講師、准教授などを経て昨年4月から人間社会学部社会園芸学科長。

